

ダダ百周年に寄せて：特別展「ダダアフリカ」の感想

その他のタイトル	Anlässlich des 100. Gründungsjahres des Dadaismus : einige Bemerkungen zur Sonderausstellung "Dada Afrika" in Berlin
著者	宇佐美 幸彦
雑誌名	独逸文學
巻	61
ページ	175-177
発行年	2017-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/10870

ダダ百周年に寄せて —特別展「ダダ アフリカ」の感想

宇佐美 幸彦

1916年にスイスのチューリヒでダダイズムが成立してからちょうど百周年となる。記念の年の2016年8月にベルリンへ行行ったところ、ベルリナー・ガレリーでダダ百周年の特別展が開催されていたので、これを訪れる機会があった。この展示会の感想について、関西大学独逸文学会(2016年11月)における講演の冒頭でも述べたのであるが、ここで改めてまとめておきたい。

この記念展示会は「ダダ アフリカ」(Dada Afrika)というテーマで、サブタイトルは「他のものとの対話」(Dialog mit dem Fremden)であった。この特別展の企画はダダをかなり広い意味でとらえているようで、そこでは1916年のチューリヒ・ダダから1920年代初期までの歴史的なダダイズムの活動期間だけでなく、例えば表現主義芸術家のシュミット＝ロットルフ(Karl Schmidt-Rottluff)の1913年の作品やハンナ・ヘーヒ(Hannah Höch)の1930年代の作品まで展示されていた。展示の主要な狙いは、現代技術社会の発展に対して批判的なダダ芸術家たちが、芸術の原点に戻ることを模索して、アフリカの素朴な芸術をモデルにしたという事実を示すことであろう。例えばカタログの最初に挙げられて、展示されている作品は、20世紀初頭にカメルーンで作られた木彫りの彫刻である。大きな目、口、鼻を持った首から上の頭部が誇張された男性の裸の彫刻で、素朴な彫りで力強さが印象に残る作品である。こうした線の太さと素朴な表情がダダイストのマルセル・ヤンコ(Marcel Janco)に大きな影響を与えたとして、その隣にはヤンコのダダのポスターが展示されている。このポスターでは二人の黒人が描かれ、前方で座っている人物は前を向いて体をやや左にひねり、右腕で頭を支え、顔を傲然と上に向けている。左奥の人物は立っており、背を向けて立ち去ろうというしぐさである。手前の人物は力強い大きな目や口をしており、カメル

ーンの彫刻と共通点があることは確かである。しかし足や胴体はヤンコの場合は力強く筋肉が盛り上がっており、カメルーンの彫刻の手足が顔に比べて貧弱であるのとは対照的に見える。おそらくカメルーンの場合は、酋長のような人物を伝説化するために作られたのであろう。それには顔が最も重要で、誇張する必要があったであろう。これに対してヤンコは個々の人物の特徴を明示しようとするのではなく、黒人の体全体にみなぎる力強さを、盛り上がった筋肉で表そうとしたのではないだろうか。

このようにコンゴ、タンザニア、象牙海岸、南アフリカなどの国々の彫刻や仮面などが展示され、それに類似したダダや同時代のヨーロッパの芸術家の作品が並べられている。「ダダ アフリカ」が特別展のタイトルではあるが、「他のものとの対話」という副題が示すように、この展示会での「素朴な」作品はアフリカだけではなく、北アメリカ、ニュージーランド、カンボジアなど世界各地から集められている。日本に関連した展示も2点あった。一つは能の般若の面である。この能面は、ヤンコの紙製の化け物（モンスター）のような面と並べて展示されていた。もう一つは、ハンナ・ヘーヒの新聞や雑誌の切り抜き帳のような「アルバム」である。ヘーヒはモダンダンスのアクロバットのようなポーズをとるダンサーの写真の隣に日本の相撲の写真を切り抜いて保存していたのである。

般若や相撲がダダと結びつくのだろうか。ヨーロッパの伝統にはなかった様式で新しい芸術活動を行うときに、世界の様々な芸術作品を参考にして、ヨーロッパの芸術に取り入れることは何も不思議なことではない。だがダダはすべての古い様式を破壊することを基本方針として掲げていたのではないだろうか。ヤンコは般若の面の制作にはどれだけの古い様式が結晶しているか知っていたのだろうか。しかもその面の使われ方は、能という伝統的な舞台で古い様式美の中で登場するのである。それはダダのめざす個人の自由、様式の破壊、伝統の解体とは正反対のものではないだろうか。相撲についても同じようなことが言えよう。相撲は一見すると何の武器や飾りもつけず裸で力比べをするのであるから、まったく素朴で個人と個人の力だけが問題になっているように見える。しかし日本の相撲はもともと神事との結びつきが強く、きわめて伝統的

である。土俵入りなど、相撲の所作はほとんどすべて儀式の連続と考えることができ、伝統的なしきたりに束縛されている面が多いのではないのか。また相撲部屋制度における、新弟子から付き人、兄弟子、親方までの人間関係は強い上下関係を前提としており、ダダの無政府主義的な個人的自由の立場とは大きく異なっていよう。

こうして考えてみると、「他のものとの対話」とは何だろうという疑問が生じる。多くの場合、表面的な類似性を見ているだけと思われる。展示品の最初におかれた、ヤンコが影響を受けたカメルーンの彫刻にしても、カメルーンではおそらく酋長の権威を表すために作られたものであり、支配欲と自己顕示欲の塊のような偶像ではないだろうか。こうした権力者の偶像を美化することはダダの本来の立場とは異なるであろう。世界の各地にはそれぞれの伝統と歴史を持った社会がある。ダダの立場から国際的な水準での対話を進めるには、それぞれの国（地域）の文化的な伝統を拒否し、これと対決するそれぞれの国の新しい芸術と結びついて初めて実りある対話が生まれるのではないだろうか。

